

博士論文要旨

老障介護家庭における知的障害者の自立

— 親の経験と子の経験から捉えるソーシャルワーク実践への示唆 —

The Independence of People with Intellectual Disabilities Living with Older Parents: Implications for Social Work Practice from the Perspectives of the Experiences of Parents and Adult Children

ルーテル学院大学大学院

総合人間学研究科 社会福祉学専攻

博士後期課程 福田 真清

現在、国内では自宅で生活している知的障害者の高齢化に伴って、知的障害のある子どもの生活を支える家族の高齢化が進んでいる。本研究は、知的障害者福祉が直面している今日的課題を踏まえ、老障介護家庭で知的障害者が自立を実現していくうえで必要なソーシャルワーク実践の視点と、その方策の示唆を得ることを目的とした。そのために、母親と知的障害者それぞれの視点から、複眼的に老障介護家庭における知的障害者の自立をめぐる経験プロセスを可視化し、そのプロセスでの自立にまつわる行動や認識、それらに影響を与えた社会的な要因を明らかにした。

第1章では、在宅生活を送る知的障害者の高齢化が進み、老障介護家庭が増加している現状を整理した。そして、老障介護家庭を対象にしたソーシャルワーク実践が必要とされる中、未だ国内における老障介護家庭を取り上げた研究は乏しく、その実態解明が望まれた。その際、知的障害者本人の声や経験を収集することで、知的障害者主体のソーシャルワーク実践に繋がっていくだろうという考えを示した。

第2章では、まず、国内における知的障害者の概要を記述した。また、知的障害者を調査対象にした先行研究を概観し、知的障害者への実証的調査に求められる調査方法や工夫の足がかりを得た。知的障害者を調査対象にした研究では、調査者側が知的障害者の障害ゆえに生じる言語理解や言語抄出の課題を補っていくことで、調査は可能になっていくものと考察した。

第2章の後半では、まず、社会福祉全体からみた自立概念、障害者福祉からみた自立概念、そして、知的障害者福祉からみた知的障害者の自立概念について、政策や先行研究それぞれを踏まえながら整理した。

次いで、国内における知的障害者を対象としたグループホーム制度の成り立ちを

概観した。グループホームが制度化された 1989 年以降、法制度の改正を繰り返しながら、グループホームで生活している知的障害者の数が飛躍的に増加していた。一方で、3 年未満の退所者が退所者全体の半数に上ることを示した。そのほか、経済的に余裕のない生活を送っている知的障害者の実情や、グループホームで生活している知的障害者の日常生活、グループホームでの生活を継続させる要因、阻害させる要因についても先行研究を用いてみていった。

そして、知的障害者を対象にしたソーシャルワーク実践について整理した。まず、知的障害者の日常生活全般を支えるために、障害程度とその障害に対する支援の必要度に応じた個別的なソーシャルワーク実践の必要性を整理した。また、知的障害者へのソーシャルワーク実践に必要な視点は、これまでに親が担ってきた「親の役割」を社会に委ねられるようにする支援とその保障、知的障害者の自己決定や自己選択という権利の尊重であった。ほかに、障害者自立支援法施行以降に図られた三障害一元化では対応しきれない知的障害ゆえの日常生活上の課題の克服を支援していく必要性をまとめた。

これらを踏まえ、本研究では「知的障害者の自立」を「親元から離れ、社会福祉サービスを活用しながら、グループホームでの生活を継続していくこと」と定義づけた。

第 3 章は、国内の障害者家族の親子関係や自立、老障介護家庭の実態について、先行研究を用いて整理した。まず、国内では老障介護家庭が増加しながらも実態解明は立ち遅れている課題を指摘した。また、国外の先行研究も、その多くは老親の視点で知的障害者の自立を捉えた研究であるため、知的障害者の視点を取り入れた知見は十分に得られていないという研究上の課題を挙げた。

こうした先行研究の課題を踏まえ、本研究では、国内での老障介護家庭における老親と知的障害者の「知的障害者の自立」をめぐる経験を把握し、その経験プロセスの過程が変容していく事象を実証的調査によって明らかにすることにした。

第 4 章は、第 1 調査と第 2 調査の目的と調査方法、分析方法、分析手順、そして倫理的配慮を記述した。

高齢の母親と知的障害者本人を調査対象にした 2 つの実証的調査は、老障介護家庭での適切なタイミングで知的障害者の自立を促すために求められるソーシャル

ワーク実践の示唆を得ることを目的に行った。調査協力者はX都市の母親 11 人と知的障害者 8 人で、うち 6 組は親子関係であった。半構造化面接によるインタビューで得られたデータの分析には、複線径路・等至性モデル (TEM) の手法を用いた。

第 5 章は、老障介護家庭において知的障害のある子どもを自立へと導いた母親 11 人の視点を通して、老障介護家庭における知的障害のある子ども自立をめぐる一連の行動や認識の変容と、その間に働いた抑制要因と促進要因を分析した。その結果、母親は知的障害のある子どもの自立をめぐって、《知的障害のあるかもしれないわが子に会う》《奔走しながら子どもに向き合う》《知らぬ間に時間が過ぎていく》《焦燥し自立のことで頭がいっぱいになる》《子どもが自宅にいない生活に慣れる》という時期区分をたどっていた。

母親の経験は【違和感に気付く】から始まっていた。[理屈ではない「あの」暗黙の仲間意識]と[子離れ・親離れの成功体験]がせめぎ合う中、【窮地に追い込まれ焦燥し決断】した母親は、子どもを【グループホーム送り出】していた。その後も自立にまつわる経験は続き、{肩の荷が降りホッとする}と{二重生活で大変さは変わらない}の 2 類型に分かれ、【将来を再考する】ことが明らかになった。

子どもの自立を目指そうとする母親の行動を抑制した要因は、[男女がひとつ屋根の下][理屈ではない「あの」暗黙の仲間意識][経済的負担の増加][父親の反対][同じ生活圏内][綱渡り状態のグループホーム]で、子どもの自立を目指そうと母親の行動や認識を後押しした要因は、[入所施設の理不尽さ][地域福祉の流れ][子離れ・親離れの成功体験][親の務め][心強い後押し][子どもの同意][グループホームで生活する子どもの意外な姿]であった。

第 6 章は、グループホームで生活している知的障害者 8 人の視点を通して、老障介護家庭における自らの自立をめぐる一連の行動や認識の変容と、その間に働いた自立への促進要因と抑制要因を分析した。その結果、知的障害者は老障介護家庭からの自立をめぐって、《当たり前で親と暮らしている》《母親の言葉を咀嚼し自立に向かう》《新生活に馴染みきれない》《グループホームで暮らしていくと決心する》という時期区分をたどっていた。

知的障害のある子どもの経験は、【親と暮らす】から始まっていた。母親に【グループホームに入るよう切り出され】た子どもは、グループホームへの事前訪問や宿泊

体験を経て、【家を出】ていた。【家に帰りたい】という気持ちが募りつつ、{なんだかグループホームもいいところ} や {野宿よりまし} だと考えるようになり、【親がいなくなってもグループホームでがんばる】と決心していたことが明らかになった。

知的障害のある子ども本人の自立しようとする行動や認識を抑制した要因は、[どこにもグループホームがない] [家にいなくちゃダメ] [お父さんが死んじゃう] [友達がやめちゃう] [いじわるが続く] で、自立しようとする子ども本人の行動や認識を後押しした要因は、[いずれグループホームに入る] [1人で暮らすすごい人] [病気のお父さんがいなくなる] [お母さんがダメになる] [通所施設がグループホームを建ててくれる] [面接に受かる] [グループホームで暮らす友達] [遠くに引っ越した友達] [グループホームの居心地のよさ] [自分と同じ家に帰れない仲間] [お母さんは自分のことだけでも大変] [今まで通りお母さんに会える] であった。

第7章は、第1調査と第2調査の結果を踏まえ、老障介護家庭に関わる支援者が知的障害者の自立に向けたソーシャルワーク実践を展開していくために必要な視点と、その方策について考察した。

老障介護家庭における知的障害者の自立へのソーシャルワーク実践の方策は、第一に、母親へのソーシャルワーク実践として、「サポーターズに関わり、将来の道筋を一緒に立てる」「『万が一』を想定した計画の作成」「グループホームで生活した後、子どもの将来を見据えていく」「子どもの自立を目指す母親を支える」という示唆が得られた。

第二に、子どもへのソーシャルワーク実践として、「実践的な体験利用を繰り返す」「知的障害当事者との関わりの場を作る」「段階を踏みながら自立を目指し、子どもの気持ちに寄り添う」「日常生活の経験幅を拡げていく」という示唆が得られた。

第三に、母親と子ども双方へのソーシャルワーク実践として、「家庭の変化を機敏にキャッチする」「子どもを支えるために、母親も支える」という示唆が得られた。

そして、第四に、仲間・組織、社会へのソーシャルワーク実践として、「子どもの自立が実現しやすい環境づくり」「宿泊体験ができる場と機会を増やす」「グループホームの役割を明確にし、母親の役割を引き継いでいく」「知的障害者が安心して生活できるグループホームづくり」という示唆が得られた。